

第 19 回講義 6 月 28 日 (火)

前回の講義についての追加的言及について、

①田辺について

田辺は、「種的基体」(民族のことと理解しておいてよい)と「個」とは、対立し、相互に否定し合っている、と考えていた——「民族のための個＝民族あつての個」と「個のための民族＝個あつての民族」というようにして——。田辺は、「此様に否定的に対立する種的基体と個との葛藤」という形での「交互否定」の運動が、「国家」のあり方だ、と考えていた。このような「二極」の「交互否定」の運動こそが国家のあり方だという国家理解を「個人」の側から見た場合、「国民の国家への結集はどこまでも一つの決断的な行為として表現されねばならぬ」(丸山② 228 頁)ということにもなる——また、エルネスト・ルナン(1823-1892)は、「国民(nation)」の存在とは「日々の人民投票」であるとしたが、それももまた基本的に同じ意味である——。

このような個人の日々の国家へのコミットメントによって、「種的基体」は日々直接的なあり方を脱して媒介されたあり方になる。

「媒介」とは、「あるものを他のものを通じて存在させること」を意味するヘーゲル哲学的用語。ヘーゲルは、直接的な存在とは、実は他者によって条件付けられた存在であり、すべての存在は直接性と媒介を含むと考えた。

このヘーゲルの考え方を今のわれわれの例で考えるとこうなる。「種的基体」の最も直接的なあり方とは、田辺の考えるところでは、「トーテム」的な氏族である。だが、「トーテム」的な氏族それ自体も、間然には無媒介ではありえない。そして、そのような原子的な形態の「種」は、個人の「種的基体」に対する否定的な働きかけを通じて——そのことによって個人の要素が漸次と強くなるという性格を強めながら——、発展していく。「種」＝「民族」とは、「個人」という「種」＝「民族」の「他なるもの」——場合によっては対立させざるもの——の媒介を通して存立するのであり、それによって条件付けられた存在だ、というわけである。

こうして「種」＝「民族」は、個々の個人のコミットメント＝媒介の働きによって成立する、そしてその個々の個人のコミットメント＝媒介の働きによって「種」＝「民族」は「国家」へと不断に転成していくというわけであるが、そのように考えるということには、「種」＝「民族」からの国家の成立にあたって、「積極的自由」＝「～への自由」という要素が重要な意味を占めているということを示している。ルナンの国民(nation)の存在とは日々の人民投票であるという言葉は、このような事態を劇的なまでに明瞭に示している。そして、田辺・丸山も基本的にこのようなルナンの発想を根柢に持っている。また、ここに、田辺や丸山の思想における民主主義的モチーフの根源がある。

このような事態を端的に示している田辺の言葉を示しておこう。

「国家は一方に於て民族の種的基体を契機とし、共同社会的直接統一(トーテム社会的統一と理解しておいてよい——今井)を予想すると同時に、他方に於てそれと否定的に対立する個人の自由なる発意とそれに基づく自律の要求とを認め、その民族的統一を個人の衆議公論と媒介する否定即肯定の統一である。それは一方に民族の種的基体を其歴史的伝統に於て維持しながら、他方に於て現在の個人をして各々其志を遂げしむる基体即主体の統一でなければならぬ」(「種の論理と世界図式」、田辺⑥ 231 頁)。

「自由なる個の選択意志を認め、これと統制とを綜合して、恰も自由契約により成立せるかの如き自由の連帯をその構造に含む国家のみ、同時に凡ての個を平等に摂取して、如何なる自由個体をもそれに背反することなくしむる如き絶対統一となるのである。…絶対的な国家は、却てその種的契機に否定的に対立する個人の自由を平等に媒介するものでなければならぬ」(「社会存在の論理」、田辺⑥ 150-151 頁)。

この田辺の言葉と次の丸山の言葉との類似性に注目せよ。

今や世界を風靡している「全体主義国家の観念」は、実際には、それが排撃しつつある「個人主義国家観の究極の発展形態」にほかならない。しかし、我々の求めるものは「個人か国家か」の二者択一の上に立つ「個人主義的国家観」でもなければ…「ファシズム国家観」でもありえない。「個人は国家を媒介としてのみ具体的定立をえつつ、しかも絶えず国家に対して否定的独立を保持するごとき関係に立たねばならぬ。しかもそうした関係は市民社会の制約を受けている国家構造からは到底生じえない…。そこに弁証法的な全体主義を今日の全体主義から区別する必要が生じてくる」(丸山① 31 頁)。

②三木について

三木は、前回の講義ノートで示したように、学生時代から「仏教的汎神論」と「国体思想」に対して批判的な意識をもっていた。ここには、三木の親鸞の対する親近感と京大時代の三木の恩師・波多野精一の影響が感じられる。つまり

①「仏教的汎神論」を含めた汎神論批判は、波多野自身の宗教哲学にとっての重要テーマでもあった——仏教的汎神論、そして総じて汎神論は、「作為」の契機が弱い。それと、

波多野は、キリスト教的観点から批判しようとしていた一。

②そのモチーフは、波多野に洗礼を受けた富士見町教会の牧師・植村正久が、教育勅語への不敬の嫌で批判の嵐にさらされていた内村鑑三を側面から支援しながら、国体論にコミットする仏教陣営に対して宗教的・思想的な批判を加え続けていたという歴史につながっている、

③その思想的系譜がこの三木の文章に流れている。

ここで、この波多野の宗教哲学のポイントとなる点だけを示しておこう。そのことによって、丸山が「古層」論文で提起した問題が、丸山のオリジナルな思いつきではなく、いかに日本近代思想史を貫く基本問題であったかということが明らかになるはずである。

「批判的宗教哲学（波多野の立場—今井）の主張する神は、意志の自己決定によつて価値の実現に向ふ人格的生活に対する神であつて、単に世界を理解し、説明せんとする理論的要求に満足を与へるものではない。

私は此のやうな神観を普通の用語例に従つて人格神論(…)と名付けよう。人格神論は神を主として世界の原因とみる理神論(…)及神を主として世界の实体と考へる汎神論(…)の両神観から区別される。私は批判主義の見地に立ち、人格神論の立場を踏んで、少しく神の観念を展開してみよう」(波多野③ 219 頁)。

「人格の欠くべからざる特徴」は「自覚」である。「自覚と云ふことも私達にあつては勿論相対性有限性を予想することは疑ないが、併しこれらのものが自覚の本質をなすと考ふべきではない。自覚の本質は自己の独立の活動によつて己自らを定立し産出する意識特有のはたらしに存在する。自覚は単に事実として与へられるもの、または与へられたる意識内容の必然の帰結として生ずるものではなくて、自己自身を産出し、定立する創造的活動によつて自ら存在を保つものである。若し自覚の核心が創造性にあるとするならば、私達はそれが絶対性と矛盾する理由を見出し得ないであらう。

かくて自覚と云ふ点から視ても、価値の実現と云ふ点より考へても、人格の本質が、自己及自己の内容を産出し、実現する、理性の独立にして自由なる活動に存することは明白である。しかしこのやうな人格的生活と特に密接な関係を保つものが、人格神論の神である。批判的宗教哲学の立場からみれば、私達の人格的生活は神的存在の最直接的な顕現であり、神的存在は、私達の人格的生活の根源として、支持者として、また理想として初めて宗教的意義を獲得するのである(224) 頁。それ故に私達は人格的であればあるだけ、神に接近し、神に類似し、神の本質を体得し得るのであると云ふことが出来よう。然のみならず一步を進めて、私達は神こそ真の人格、完全なる人格なれとも云うべきであらう」(波多野③ 224-225 頁)。

「……汎神論の種々相を一樣に取扱ふことは、ともすれば私達を偏見と誤謬とに導くであらう。然しながら私はそれらの共通にして根本的な特徴を捉へ来つて、多分無理もなく次の如く語り、次の如く論じ得ようかと思ふ。

第一、凡ての汎神論は神と世界とを同一と視、しかし神を唯一の実在とする一元論である。従てそれは神の絶対的実在と云ふ抽象的特質にのみ満足する理論的形而上学にとつて必然の帰結であるに相違ない。、けれどもこのやうな形而上学は、私達は到底それを徹底することが出来ないのである……」(波多野③ 228 頁)。

「第二、汎神論の他の一層重大なる弱点は、それが自然主義(…)の立場に於てのみ可能である」と云ふところから現れるやうに見える。蓋し自然とは動かぬもの、変らぬもの、共通なるもの、平等なるものの名である。だから自然の見地から考へればショーペンハウエルが最巧な比喩を以て語つたやうに、村の百姓が博奕を打つために集るのも、一國民または全世界の運命を身に負ふ將軍が一堂に会して画策するのも、つまりは同一事たるを出でないので(229) 頁。自然主義の特徴は価値よりも存在を重んじ、個性よりも普遍者を尊ぶにある。平等一如なる実在の中に万象を没入せしめ、永久不変なる法則以外に個性の特有の権利を承認しないのが自然主義の根本思想である。しかし汎神論とは正に斯の如きものではないか。即ち汎神論の説く絶対的実在、所謂一にして一切なる実在は、存在と云ふ万有に共通なる性質以外には、何等本質的な内容をもたないのである。永遠に自己同一を保ち、常住に自己の中に停りて、あらゆる自由なる創造を斥けるものが汎神論の云ふ実在である。それ故に、縦差別と多様とを認めたにしても、ぞれら凡ての具体的内容は悉く一樣なる必然性に支配され、同一なる法則の事例たる以上の意味をもち得ないであらう。さて斯の如く一切が一であり、また等しく必然であるならば、真偽、善悪等の価値の差別はあり得ず、価値の実現に向ふ人格の自律的な努力、自由なる活動も無意義に終らねばならないのは明らかである。併るに私達の立つ立場は、個性を重んじ、自由を尊び、価値の実現に赴く人格の努力を尊重する。自然主義に反対し理想主義を主張するものとして、批判的宗教哲学は汎神論を排斥せねばならぬのである」(波多野③ 229-230 頁)。

この波多野の議論は、ギリシャ的自然哲学＝汎神論とそれを克服したユダヤ・キリスト教という図式となって現れる。この問題は、現代におけるハンナ・アーレントの議論などと絡んで、はなはだ興味深いものとなっている。これについては、いずれ簡単に立ち入る機会を持ちたい。